



イライラするカタカナ語

昨日の推薦入試の集団討論のテーマは、初めての実施ということもあって、割とオーソドックスなテーマであったのだが、例えば私は「カタカナ語の使用が増えていることをどう考えるか」といったテーマで討論してもらっても、日比谷レベルの推薦受検生なら結構面白いのではないかと考えている。

ちなみに、以前この通信でも書いたが、私は若者（バカ者）の「リスペクト」というのが大嫌いである。そしたら、年末の朝日新聞に、「わざとらしいカタカナ語もイラつかせる」例として、この「リスペクト」が採り上げられており、一人「フムフム」と頷いたものであった。

その同じ紙面に、「イライラするカタカナ語」BSET20が出ていた。さて、君たちはどれくらい知っていたり、使っていたりするのだろうか？（12月8日のbeランキングより）

- 1 コンピテンシー
- 2 インスタレーション
- 3 インキュベーション
- 4 コモディティー
- 5 ダイバーシティー
- 6 サステイナブル
- 7 コンソーシアム
- 8 オルタナティブ
- 9 ステークホルダー
- 10 リテラシー
- 11 サーベイランス
- 12 デジタルデバイド
- 13 アジェンダ
- 14 アカウンタビリティ

- 15 シーズ
- 16 インタラクティブ
- 17 カウンターパート
- 18 セグメント
- 19 タスクフォース
- 20 マイルストーン

*

1は、「高い業績を持つ人間特有の行動の特徴」という意味。2は、美術用語で展示空間全体を作品とする手法。3は、起業家支援。もともとは「孵化」の意。4は、製品のメーカー間の差がなくなり、価格競争になる現象。5は、「多様性」の意から、企業が多様な人材を活用すること。6は、「(環境に配慮して)持続可能な」。7は、複数の企業・団体などが共同の目的でつくる企業・団体。8は、「二者択一の」から派生して、「既存のものに代わる選択肢」の意。9は、企業活動の直接的利害を受ける関係者。10は、もともと「読み書き能力」の意だったが、今では主として「情報を解読する能力」の意に。

*

カタカナ語には、新らしさを強調したり、目立たせたりするといった効果があるし、訳語にしてしまったのでは伝わりにくいニュアンスを持っている場合もあり、効果的に使用すれば、表現を正確にしたり豊かにしたりする上で一定の意義がある。しかし、使いすぎは、コミュニケーション（だけでなく人間関係？）を阻害することにもなりかねない。そんな特徴を面を意識して、使いこなしていきたいものである。